

不思議な心地よさを感じた。

たぶん、会場を埋めつくしたすべてのOTさんもそうだと思う。

何やら少し違うものが、同じ目的に向かって動いている時の心地よさがあった。

根底に近い精神性を有するというのも存分に感じる事ができた。

何より、発表する先生、世話人の先生、司会者の先生の心地よい笑顔と、心地よい声がそれを物語っていた。

悲しいかな作業療法士ではない私には学術的な内容は半分も理解できない。

しかし、疾患別に人を評価し、治療するのではなく、生活や作業の面から事象（fact）や真実（true）を捉え、感じ、考えていく姿勢が、ただの研究ではないような印象を持った。

今も片麻痺の私はいつも自分が障害国からの派遣大使のような気持ちで学会に参加する。

その面から考えると、教科書に載っている作業療法が、嬉しいことに我らの近くに歩んできているようだった。

作業療法は、子供から老人まで、障害者から健常者まで、怪我人から病人まで、精神科の患者さんまでと本当に守備範囲が迷子になるほど広いと感じる。

その広い守備範囲を「作業」一本で勝負するのである。

解釈、学説、対象、分野と多くの方向に向かってベクトルが進む。

対象者である「障害者」もベクトルを合わせたい。

確かに「コラボレーション」は今後、重要性を増すようである。

デイサービスけやき通り

葉山靖明